三、八高の教育と学生生活

◆学則からみる教育活動の概要

第八高等学校に三部がそろった一九〇九（明治四二）年度における学則に基づいて、八高の教育活動の概要をみておきます。学則は全一一章六六条で構成され、各章は「学科」「学年学期及休業」「入学及在学」「成績考査」「特待生」「授業料」「休学及退学」「懲戒」「校章及制服」「学寮」「図書及器械」となっています。

学則によると、毎学年は九月一一日に始まって翌年九月一〇日に終わるものとされ、一学年三学期制（第一学期は9／11～12／24、第二学期は翌年1／8～3／31、第三学期は4／8～7／10）になっていました。また、入学者は、文部省令「高等学校大学予科入学者選抜試験規程」に基づいて、入学志望段階で修業する部類を指定することになっており、部類ごとに志望者数が募集枠をこえた際に選抜試験が行われることになっていました。**表1**に同年度における部類と入学者の内訳を示しておきます。

なお、第一章で述べたように一九一八（大正七）年の新高等学校令によって高等学校高等科

表1　1909年度の部類と入学者内訳

部類	科	入学者数（志望者数）
第1部甲類	英語法律科、政治科、経済科、商科	26（ 72）
第1部乙類	英語文科	10（ 18）
第1部丙類	独語法律科、政治科、独語文科	43（ 66）
第2部甲類	工科	76（227）
第2部乙類	理科、農科、医科のうち薬学科	40（ 87）
第3部	医科	40（283）

（『第八高等学校一覧』より作成）

は文科および理科の二学科制となり、部類制は廃止されました。また一九二一年からは四月入学制に改められ、翌一九二二年度から一学年二学期制に変更されました。

◆生徒心得にみる教育目的

第八高等学校の生徒心得は、一九〇八（明治四一）年九月に定められました。それは次のとおりです。

本校生徒タルモノハ特性ヲ涵養シ知能ヲ練磨シ以テ国家有用ノ器材タランコトヲ期スヘシ居常守ルヘキ道多端ナリト雖モ茲ニ其ノ標的トスヘキ大綱ヲ挙示スルコト左ノ如シ

一、志操ヲ固クシ実行ヲ励ミ学業徳器ノ大成ヲ期スヘキコト

二、身体精神ヲ鍛錬修養シ剛健快活ノ気象ヲ振起スヘキコト

三、独ヲ慎ミ己ニ克チ忠信廉恥ノ心ヲ存スヘキコト
四、規律ヲ守リ責任ヲ重ンシ謹恪重厚ノ風ヲ持スヘキコト
五、師長ヲ尊敬シテ温恭自虚ノ道ヲ尽クシ朋友ヲ親愛シテ協同融和ノ実ヲ挙クヘキコト

ここでは、八高生が日々めざすべき心得として、学業を成し遂げ人格を高めるという初心を忘れず実行すること、心身を鍛えてたくましくきびきびとした気性を養うこと、克己心をもって二心なく忠実であること、規律を守り責任感をもち慎み敬う心を身につけること、目上の人を敬って穏やかで慎み深くし友達との友情を深めて協力しあうことなどが示されています。

◆勤勉八高

第八高等学校の校風を理解する手がかりとして、以下では「勤勉八高」「教練八高」「スポーツ八高」という三つの観点から紹介しておきます。

表2は、一九一一（明治四四）年度と一九二一（大正一〇）年度の八高生の出席状況を示しています。八高生の出席率は、創設当初が平均九五％で、大正期以降も平均九四％程度であり、かなり良好であったとされています。ちなみに後者（一九二一年度）の授業日数・時数は、第一学年が一九四日・平均九七〇時間、二学年が一九四日・平均九六八時間、第三学年が一八九

表２　八高生の出席状況（1911および1921年度）

年度	区分／部・学科		出席すべき日数	出席延べ日数	出席率(%)
1911	第１部		47,390	44,705	94.3
	第２部		71,036	67,224	94.6
	第３部		25,018	24,077	96.2
1921	文科	第１年	22,698	21,880	96.4
		第２年	20,952	19,565	93.4
		第３年	20,979	18,857	89.9
	理科	第１年	30,846	29,703	96.3
		第２年	31,816	29,492	92.7
		第３年	22,836	21,235	93.0

（『第八高等学校一覧』より作成）

表３　八高生の学年成績概況（1911および1921年度）

年度	区分／部・学科		進級（卒業）	落第	休学	落第率(%)
1911	第１部		198 (63)	20 (1)	12	8.7
	第２部		262 (75)	57 (6)	24	16.6
	第３部		100 (26)	10 (0)	14	8.0
1921	文科	第１年	116	1	4	0.8
		第２年	105	3	4	2.7
		第３年	(110)	1	3	0.9
	理科	第１年	148	11	7	6.6
		第２年	145	19	5	11.2
		第３年	(116)	6	4	4.8

（『第八高等学校一覧』より作成）

注）1911年度における（　）内は第３学年を内数で表示。

日・九八二時間でした。

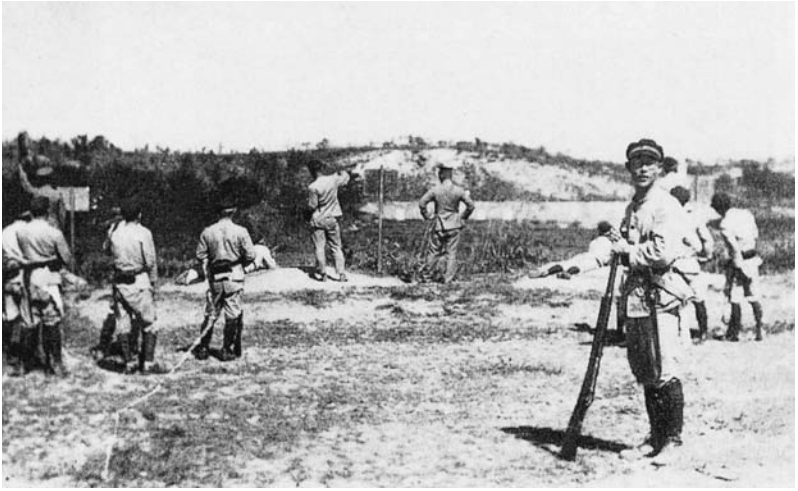
また**表3**は、同じく一九一一年度と一九二一年度の八高生の学年成績の概況を示しています。

いずれの年度にも休学者と落第者が存在しますが、総じて明治期より大正期の方が落第率は低く、また文科（第一部）と理科（第二・三部）では後者の方が落第率は高くなっています。こうした落第者の存在は、当時の八高における修学状況が厳しいものであったことを連想させます。

◆教練八高

旧制高等学校における軍事教練および現役将校らによる検閲講評の実施は、第八高等学校が初めて実施しました。のちに「教練八高」との異名を生んだこうした軍事教練は、「学校を国民的修養の道場と見做（みな）し、厳格な心身の鍛錬、国体的訓練の養成の重要なことを認めた」大島校長の創意によるものとされています。

『第八高等学校一覧（第二年度）』（一九一〇年刊）に収録された学則施行細則では「検閲ハ生徒隊規律ノ張弛志気ノ振否服装ノ整否及教練ノ進歩ヲ検スル為メニ之ヲ行フ」とされており、教練は創設当初から実施されていたことがわかります。こうした教練は戦前期を通じて実施さ



小幡ケ原での射撃訓練
（1923年、八高八十年祭記念誌『わが友 若き旅人よ』より）

れましたが、一九二一（大正一〇）年度の『第八高等学校一覧（第一四年度）』以降の学則施行細則には「野外演習及射撃演習」に関する諸規定が登場しています。

また、『大島義脩先生伝』（一九三九年刊）の中では、「軍隊生活を親しく経験した大島校長は、極めて真摯（しんし）厳格な態度を以て自ら検閲にあたり、…（略）…体操授業視察の師団長の賞讃を博した程で、学問尊重と並行して教練には頗（すこぶ）る熱心であった」とも記されています。

◆スポーツ八高

第八高等学校では、創設時に全一一項目からなる「運動奨励ニ関スル方針」が定められていました。その一部を次に示します。

運動奨励ニ関スル方針

一　運動ハ体育心育両全ヲ目的トス

一　事情ノ許ス限リ各種ノ運動ヲ均シク奨励ス

一　全生徒ハ運動ニ参加シ各人常ニ一種以上ノ運動ヲ練習スルヲ例トス

一　運動ノ為メニ学業ノ時間ヲ割カサルヘシ

一　実力ノ養成ヲ主眼トシ競技上ノ勝敗ニ腐心セサルヘシ

一　選手ヲ養成セス

…（以下略）

右の方針からは、競技上の勝敗にこだわることなく、心身ともにバランスのとれた発達をめざすための各種運動が積極的に奨励されていることがわかります。とりわけ「選手ヲ養成セス」との一項は、今日のレクリエーショナル・スポーツにも通じるものがあると思われますが、この規定に基づき八高では一九二一（大正一〇）年度までは選手制度が認められていませんでした。そのため、運動部は存在しても特定の選手は存在せず、対校試合なども有志を募って行うという形をとっていました。

八高に他校と同じような選手制度が導入されたのは、柴田徹心第三代校長が就任した翌年度

の一九二二年四月のことでした。これをうけて同年五月に八高は、東海学生野球大会に初めて正式な選手派遣を行っています。また、この選手制度の導入によって、のちに恒例となる第四高等学校（金沢）との対校試合（いわゆる「対四高戦」）が始められ、第八高等学校校友会に組織的な応援団も結成されました。

選手制度導入後の八高では、野球部、陸上競技部、庭球部、漕艇部など既存の運動部に加えて多くの運動部が創部されています。こうした八高運動部の活躍については、髙橋義雄『名古屋大学　スポーツの歩み』（名大史ブックレット3）で触れられています。

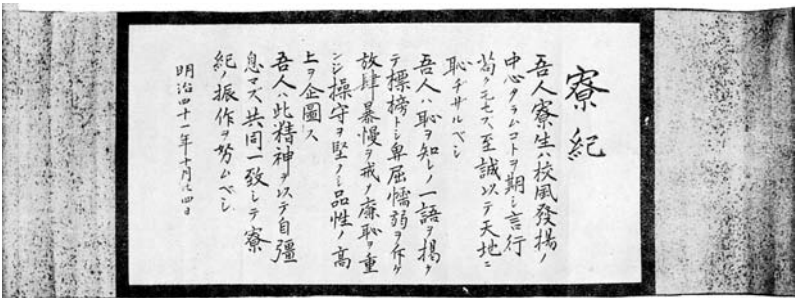
◆寮紀の制定

第八高等学校の学寮は、一九〇八（明治四一）年一〇月に制定された寮紀をはじめとして、学寮生徒規約等に基づいて運営されていました。

寮　紀

吾人寮生ハ校風発揚ノ中心タランコトヲ期シ言行苟クモセス至誠以テ天地ニ愧チサルヘシ

吾人ハ恥ヲ知レノ一語ヲ掲ケテ標榜トシ卑屈懦弱（だじゃく）ヲ斥ケ放肆（ほうし）暴慢ヲ戒メ廉恥ヲ重ンシ操守ヲ固クシ品性ノ向上ヲ企図ス


寮紀
吾人寮生ハ校風發揚ノ
中心タラムコトヲ期シ言行
苟クモ之ニ至誠以テ天地ニ
恥チサルベシ
吾人ハ恥ヲ知レノ一語ヲ掲ゲ
テ標榜トシ卑屈懦弱ヲ斥ケ
放肆暴慢ヲ戒メ廉恥ヲ重
ンジ操守ヲ堅ク品性ノ高
上ヲ企圖ス
吾人ハ此精神ヲ以テ自彊
息マズ共同一致シテ寮
紀ノ振作ヲ努ムベシ
明治四十一年十月廿四日

寮紀（『瑞寮史』より）

吾人ハ此精神ヲ以テ自彊息マス共同一致シテ寮紀ノ振作ヲ努ムヘシ

ここには、八高の学寮生として、社会に恥じることがないように「恥を知れ」をモットーにして、剛健かつ誠実で節操を守ることによって品性を高めようとすることが大切であり、すべての学寮生が協力してこのことに日々努力すべきことがうたわれています。

◆学寮に関する諸規定

一九〇九（明治四二）年度以降の第八高等学校学則には、学寮に関する一章が設けられています。そこでは、「学寮ハ生徒ヲ居住セシメ本校ノ教育ト相俟ッテ之ヲ訓育スル處トス」（学則第五〇条）と規定され、学寮生活も教育活動の一部であることが示されています。そして「新ニ入学シタル生徒ハ特別ノ事情ニ依リ通学ノ許可ヲ受ケタルモノヽ外総テ学寮ニ入ルヘキモノトス」（同

五二条）とされ、原則として全寮制となっていました。なお、この全寮制については学則施行細則の「在学及休学」部分において、特別の事情によって通学を許可された者以外の「生徒ハ左記ノ一ニ該当スル者ヲ除ク外入学後一学年間ハ総テ学寮ニ入ルヘク其後ハ学寮又ハ本校公認下宿ニ入ルヘシ」とされています。

学寮については、前述の寮紀や学則のほかに学則施行細則、学寮細則、学寮生徒規約、入寮者心得などの諸規定が定められています。このうち学則施行細則には学寮に関する一章が設けられ、より具体的な諸規定がなされています。そこでは、「学寮生徒ハ生徒監指導ノ下ニ秩序ヲ保チ風紀ヲ維持スルヘシ」とされ、日常生活全般について生徒監による厳格な管理・指導を受けながら学寮生活を送ることが求められていました。

◆学寮規約

学寮規約については、学寮生徒が校長の認可を受けて制定・実行することが学寮細則で定められており、これに基づいて一九〇九（明治四二）年に最初のもの（全一一条）が制定されました。その後、同規約は一九二〇（大正九）年に「学寮自治」の樹立をめざして大きく改正されています。

ここでは、改正後の学寮規約に基づいて当時の学寮運営の一端を紹介します。同規約は全七

章五六条からなり、第一章第一条で「吾人ハ寮紀寮則ヲ守リ自治ノ精神ニ基キテ善美ナル校風ヲ発揚センコトヲ期ス」と定め、同第二条で「吾人寮生ハ実践躬行以テ寮内ノ秩序整頓ノ保持ニ力ム」と定められています。

学寮には、寮生代表としての学寮委員が置かれます。この学寮委員が学寮全体の総括的な事務処理を行い、各部の委員とともにこの規約の実行を督励することとされています。ここにいう各部とは学寮内に設けられた炊事部・会計部・運動部・文芸部・衛生部・庭園部をさします。炊事部は、「炊事ハ学寮ノ自営トス」ならびに「在寮生ハ総テ本部ノ食事ヲトルベキモノトス」等の方針に基づいて設けられ、炊事部会計は独立会計として一般の会計部と区別されていました。運動部は、各種の運動・競技・旅行のほか「兎狩リ」等に関する事務を担当するとされています。文芸部は、雑誌発行や寮歌、学寮演説会・講演会に関する事務を担当しました。

また学寮の各室には、室員代表としての室総代一名が置かれました。この室総代、各部幹事と学寮委員で構成されるのが室総代会議で、学寮規約の制定・改正のほか学寮に関する重要事項を協議・議決する場となっていました。

◆寮歌「伊吹おろし」

名古屋大学が毎年発行する『学生便覧』には学生歌・応援歌・寮歌が掲載されています。こ

のうち寮歌は、「第八高等学校寮歌　伊吹おろし」（中山 久 作詞、三橋要次郎作曲）が紹介されています。

戦前、旧制高等学校の学寮では個性豊かな寮歌が数多く作られました。その数は約二五〇〇曲ともいわれていますが、正確な曲数は明らかではありません。

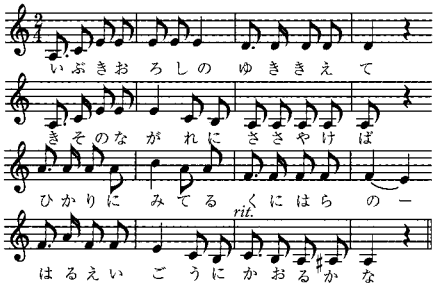
第八高等学校で最初に選定された寮歌は「殺伐の風」（大木俊輔作詞、今井坂雪作曲）で、一九一二（大正元）年のことでした。これ以後、八高でも寮歌選定が行われるようになり、翌一九一三年には新たに三曲が選定され、さらに一九一六年には寮内だけでなく校内一般に寮歌募集を行って優秀作品三曲を選定しています。前述した「伊吹おろし」は、この校内募集によって翌一九一七年に選定された寮歌の一つです。同年、八高の寮歌が全部で八曲となったことを契機に、八高最初の寮歌集が刊行されています。この寮歌集の刊行は、「平静な当時の寮の内外に異常な感激を引き起した」といわれています。

なお、八高創立六〇周年記念事業が行われた一九六八（昭和四三）年に刊行された同記念事業実行委員会編『寮歌集』には、八高校歌・寮歌・応援歌など約一〇〇曲の歌詞・楽譜が収録されています。

第八高等学校寮歌

伊吹おろし

中山　久 作詞
三橋要次郎 作曲



第八高等学校寮歌

中山　久 作詞
三橋　要次郎 作曲

「伊吹おろし」

一、伊吹おろしの雪消えて
木曽の流れに囁けば
光に満てる国原の
春永劫に薫るかな

二、夕日あふれて草萌ゆる
瑞穂丘に佇めば
零れ地に咲く花菜にも
うら若き子は涙する

三、見よソロモンの栄耀も
野の白百合に及かざるを
路傍の花にゆき暮れて
果てなき夢の姿かな

四、花に滴る日の水沫
命の啓示を語るとき
希望に滾ぎる若き頬を
はるかに星は照すなり

五、神秘の闇のおとずれに
いつしか寮の灯火は
瞬きそめて我を待つ
地上の夢よいざ去らば

六、沓霧融けし丘の上
いづくともなく春をよぶ
歌やすらかに流れ来る
紺青の月影濃けれ

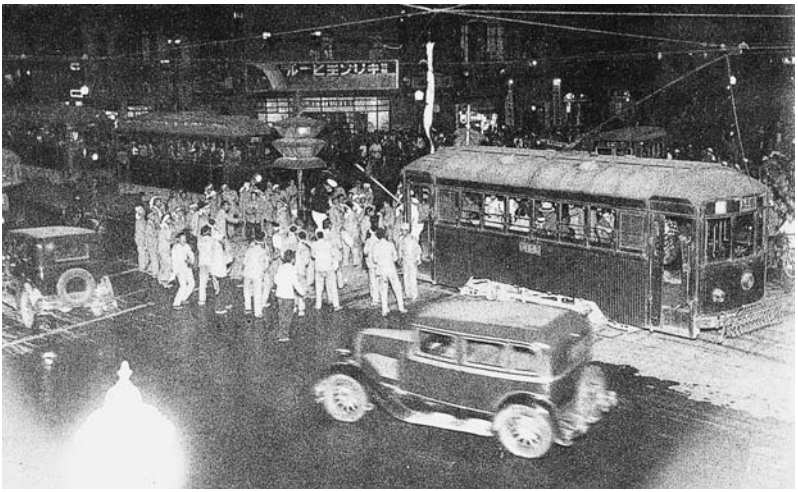
伊吹おろし（『名古屋大学学生便覧』より）

◆学寮での生活

第八高等学校第三代校長である芝田徹心は、（旧制）高等学校における学寮生活の意義について、旧制高校は人格教育を行って紳士を養成する場であり、この人格教育は人格の道徳的修養を意味し、その人格修養には主観的方法によるものと客観的方法によるものとがあるとした上で、次のように述べています（木村編『瑞寮史』はしがき）。

主観的（静的）修養は独自の工夫により研究によりて其の功果を挙ぐることが出来るかも知れないが、客観的（動的）修養に至りては、結局人と人との接触交渉によつてのみ始めて体験し得らるゝことで、離群索居では勿論のこと、交友少き生活に於ては到底不可能のことである。学寮生活が高等学校教育中特別の意味を持つと云ふのは実に此の点に於てゞある。…（略）…斯くして学寮生活が人格の動的修養の上に多大の便益あることは殆ど疑ふ余地がないのである…（以下略）。

右のような学寮の意義づけは、八高に限らず多くの旧制高校においても同様であると思われます。ただし、実際の学寮生活では、前述の寮紀や学寮規約などの規則に縛られながらも、総じて自由奔放な生活が繰り広げられたようです。



「ストーム、市電を止める」（1933年、『わが友 若き旅人よ』より）

◆ストーム

『広辞苑（第五版）』によると、「学校の寄宿舎などで、夜、大勢が歌を高唱したりして騒々しく練り歩くこと」と説明されています。現在においても一部の高校や大学などの行事に「ストーム」という名称は継承されているようですが、旧制高校当時のストームは現在のものと趣が異なっています。

第八高等学校の場合でも、『瑞寮史』『第八高等学校学寮史』など当時の学寮生活を記した書物をみると、八高創設直後の代用学寮の頃からストームが行われており、年を追うごとにストームは頻繁かつ激しく行われるようになっています。特に昭和初期においては、日常的な小規模なストームのみならず、大規模なストームが行われることがあったようです。たとえば、一九二八（昭

和三）年に創立二〇周年記念祭の際に行われたストームは、八高運動場で始められた全校コンパが盛り上がって校外にあふれ出し、ついには市街地中心部の栄町交差点でデカンショ踊りとなって名古屋駅にまで至ったとのことで、これが街上ストームの始まりであるといわれています。また一九三二年には、北寮と南寮との間で「無破壊と統制を理想としてゐた八高ストームの伝統」を傷つけると評された「大破壊ストーム」が行われ、翌年にも名古屋市内繁華街の交差点で市電を止めるようなストームが行われるといったことがありました。

◆漫画帖「八高生のぞ記」

第八高等学校の学生生活をコミカルなタッチで紹介した資料に、漫画帖「八高生のぞ記」があります。全二四点のはがきサイズの漫画を収録した「八高生のぞ記」は、昭和期初めの「自由と友情と青春を謳歌する八高生の生態」を見事に描き出しています。次頁に、そのいくつかを紹介しておきます。

5．デカシショ踊り

デカンショ　デカンショで　死ぬ迄踊れ　コリヤコリヤ
　俺が死んだら　子が踊る　ヨーイ　ヨーイ　デカンショ

デカンショ踊りを飜訳すれば、出鱈目ダンスだ。バット一本とデカンショを知っていれば、御令嬢方にも踊れますよ。嘘だと思ったら、お母さんの御留守に踊って御覧なさい。

1．入　　寮

「君！　大分荷物が重いやうですね持ってあげましょうか？」
「エ、　有難う」などと渡したら敗因、ダニのやうにくっついて、「是非××に退入って呉れ給へ」と来る。新入生を勧誘するのに各運動部員の活躍は目覚しいものである。

6．寮　　雨

時間と労力の経済のために、我輩等最も卓越せる人格者は寮雨と称する至極便利な方法で、身を軽くし、以って青春を最も有効に費そうとする。夏の夜など晴天下で勉学に余念のない折、微風に送られて来る妙なる香り……なんの、二階の野郎が又寮雨してやアがる。畜生！

寮雨蕭々襟もと寒し　コリャコリャ
　月が見かねて雲がくれ
　　ヨーイ　ヨーイ　デカンショ

8．寮歌合唱

見よソロモンの栄耀も
野の白百合に及かざるを
路傍の花にゆき暮れて
はてなき夢の姿かな

てな寮歌を怒鳴り出すと疲れた頭も爽した気もけし飛んで爽快になる。俺達の休息法の一つだ。

漫画帖「八高生のぞ記」（『八高五十年誌』より）